

かゑらじと かねて思へハ 梓弓
なき数に入る 名をぞとどむる
四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第39号

平成28年12月13日

発行＝四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

「大阪史蹟辞典」には正平6年とあるが

香具波志神社(淀川区)に残る駒繫ぎの楠

正平16年9月、神崎川の戦いで楠正儀、社前に祈願か

太平記巻36「秀詮兄弟討死の事」に載る

会員の山崎さんから、「大阪市淀川区加島にある香具波志神社に残る“駒繫ぎの楠”は、貞治元年1362、正儀が馬をつないだとの記録があります。調べてくれませんか。」と、宿題をいただいた。

結論から先に書くと、以下の通り。

楠正儀は、正平16年(1361)9月、神崎川で佐々木秀詮兄弟と戦うこととなり、加島明神(香具波志神社)の楠に馬をつないで、必勝を祈願した。

そして、9月28日、楠正儀は佐々木秀詮兄弟を討ち取り、神崎川に落ちた敵兵を、渡辺橋の時の正行同様に、助け上げ、小袖を与え、薬を与えて京に帰した。



しばらくは、異形の姿を留めていたのであるが、それも危ないというわけで同51年現在の形となった。

正平6年(1351)頃、正成の三男で正勝の父親楠木正儀は、河内、和泉の守護職を勤めた折、守護職佐々木秀詮と争い、神崎川を挟んで戦う

こととなった。

その直前正儀は香具波志神社に参拝し、この楠に愛馬をつないで必勝を祈願、靈験あらたかで快勝し、やがて京に攻め入って足利義詮を近江へ敗走させるきっかけとなる。

太平記に「楠木正儀五百余騎河内の国を出て・・・神崎川近く加島に陣をとる・・・加島明神の森に駒をとめ、道に沿いし

楠樹、日をうけて繁茂なす状を見て、いたく喜び駒をつなぎて社前に祈願申しける・・・」と、出ている。

大阪史蹟辞典に載る正儀駒つなぎの樟

この事については、三善貞司編「大阪史蹟辞典」(清文堂)の中の〈正儀駒つなぎ樟〉に詳しく載っているので、以下紹介する。

— まさのりこまつなぎくす

香具波志神社境内左に小祠をのせた1.6メートルほどの切株が、玉垣に囲まれて残り、前に天然記念物楠木正儀駒繫樟の石柱が建っている。

樹齢八百年、幹回り7.5メートル、樹丈27メートル、大阪府下第2位と云われ昭和13年天然記念物に指定されたこの大楠樹は、惜しくも公害のためか同43年枯れ死した。全部切り倒すのはもったいないので樹先や枝を払い、

太平記の件を探すが見つからない

ところが、太平記をくまなく探したが、この件はどうしても見つからない。そこで、大阪市経済戦略局文化課に、以下の通り、照会した。

【問い合わせ内容】

現在、香具波志神社の境内に残る小祠をのせた楠木の前に楠木正儀駒繫樟の石柱が建っています。昭和13年に大阪府天然記念物に指定されましたが、その後枯れ死し、現在の形になった、とあります。

この楠木は、楠木正儀が、正平6年ごろ、香具波志神社に参拝し、愛馬をつないだといわれているようです。そして、その出典として、大阪史蹟辞典(118頁)には、「太平

記」にその旨が記されていると記しています。しかし、太平記を調べましても、その該当箇所が分かりません。

太平記の該当場所を教えてくださいませんか。よろしくお願いします。

【回答】

当局が所管する大阪歴史博物館に確認しましたところ、次のとおり回答がありました。

楠木正儀と香具波志神社境内の楠木につきまして、「大阪史蹟辞典」P118において、「太平記」を出典として引用されております文章は、ご指摘のとおり「太平記」にはございません。

出典が誤っている可能性がありますので、出版社を通じ著者にお尋ねいただければと存じます。

また、「大阪史蹟辞典」は、当該の出来事が正平6年頃としていますが、「香具波志神社千年史」では、正平16年または正平17年のこととしております。

なお、「太平記」巻三十八には、正平17年に神崎橋付近で合戦があったことが記されております。

以上、お答えさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

香具波志神社千年史では正平16年か17年

大阪市からの回答を受けて、清文堂に問い合わせをしたところ、編者の三善貞司氏は入院療養中とわかり、ご本人には連絡が取れなかった。

三善氏はおそらく出典を間違えられたのであろう。

そこで、改めて太平記を繙いてみた。すると、以下の件が登場する。

*太平記巻三十六

秀詮兄弟討死の事

また同じき年、康安元年・正平16年の九月二十八日、・・・

和田・楠（正儀）これを聞きて（赤松の更迭）、よき時分なりと思ひければ、五百余騎を率して、渡部（天満、天神あたりか）の橋をうち渡り、天神ノ森（大阪市西成区天神ノ森）に陣を取る。佐渡判官入道道誉が嫡椀、近江判官秀詮・舎弟次郎左衛門、かねて在国したりければ、千余幾にて馳せ向ひ、神崎の橋（尼崎市神崎）を隔てて防ぎ戦わんと議しけるを、・・・

佐々木判官兄弟は、橋の辺まで落ち延びたりけるが、鼎二郎が、「橋の落ちて候ぞ、とても叶わぬ所なり。返して討死させたまへ、御供申さん」と言いけるに恥ぢしめられて（恥を思い知らされて）、兄弟二騎引き返して、やにはに討たれてんけり。・・・

そのほか二百五十余人は、皆川に流れてぞ失せにける。楠、父祖の仁恵（阿倍野の合戦に楠正行が捕虜に温情を施したことが見える。）をつぎ、情けある者なりければ、あるいは野伏どもに生け捕られて面縛（両手を後ろで縛り、顔を前に突き出させられた）せられたる敵をも斬らず、あるいは川より引き上げられ甲斐なき命生きたる敵

をもいましめ置かず（しばったりせず）、赤裸なる者には小袖を着せ、手負いたる者には薬を与えて、京へぞ返し遣わしける。（敗軍の佐々木勢は）身の恥悲しけれども、喜ばぬ者はなかりけり。

また巻末の関係年表には、康安元年（正平16年1361）9月28日、和田・楠、摂津に佐々木秀詮兄弟を破る（巻36）とある。

以上の事から、冒頭の結論を導いた。

出典の再確認、そして訂正を

またこのことについては、淀川区役所総務課にも照会したが、淀川区に残る冊子の関連ページのコピーを送っていただいた。以下、関連部分を掲載する。

一 正平6年（1351）楠木正儀（1329～？）。楠木正成の三男）は、河内・和泉の守護職でしたが、摂津守護職佐々木秀詮と神崎川を挟んで合戦になります。その直前香具波志神社に参拝して戦勝を祈願するため、この楠に愛馬をつないだといわれます。ご利益あらたか、合戦では大勝利し、京に攻め入って將軍足利義詮を近江へ敗走させるきっかけになります。

太平記に「（正儀）五百余騎河内国を出て神崎川近く加島に陣を取る。加島明神（香具波志神社）の森に駒を止め、道にそひし楠樹日を受けて繁茂なす状を見ていたく喜び、駒をつなぎて社前に祈願。」と記されています。

この冊子の出典は、ほぼ文章が同じことから、おそらく三善貞司氏の大阪史蹟辞典と思われる。

大阪日日新聞の2011年6月18日付紙面「楠木氏の一族（10）」でも、この事が取り上げられており、正平6年（1351）の事績とされています。

今一度、出典を確認の上、訂正されることを願います。

★ ★ ★ ★ ★

建武以後楠木邸傳説地の碑を訪ねる



11月10日、東京からお見えの広木氏を案内して千早赤阪の建水分神社に岡山禰宜を訪ね、正行直筆の裏書残る扁額を拝見し、建武以後楠木邸傳説地の碑が建つ地（桐山地区）を訪れた。

ご案内いただいた地元の方のお話では、かつてここに楠木氏のお花畑があったとの伝承が残っているとの

ことで、今は、柿畑となっている。（写真：桐山地区の柿畑の一角に建つ建武以後楠木邸傳説地の碑）

発掘調査によって、楠公誕生地よりも後の時代ということが確認されており、建武以後、正行・正儀時代に新邸が営まれたと伝えられている。

（文責「四條駿楠正行の会」代表 扇谷昭）